

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

親鸞聖人御誕生八百年五十年、立教開宗八百年の慶讃法要が終わりました。法要期間中に京都国立博物館では特別展「親鸞」が開催されました。西本願寺だけでなく、浄土真宗の各派がそれぞれに所蔵する名宝を集めた特別展覧会ということで拝観してきました。

親鸞聖人が生きた時代から八百年過ぎていくというのに予想以上にたくさん直筆の書が残っていることにまず驚きました。それはどれほど大切に守られてきたかの証であり、どれだけたくさん聖人がお書きになったかの証であります。身近に集まる者達だけでなく、遠く離れた門弟へも精力的に教えを説かれる聖人の姿勢の証でありましょう。

特に圧巻だったのは、国宝の「観無量寿経註」と「阿弥陀経註」でした。お経が記された巻物ですが、そのお経の周囲の紙の余白には親鸞聖人が書き加えられた注釈でビッシリ埋められており、それだけでは足りないばかりに裏面にもビッシリ書き込まれていました。長い迷いと苦悩の時間を過ごされた後に真実の教えに出遇われた親鸞聖人の、その教えに対する信頼と喜びがどれほどのものだったかをひしひしと感じる、まさに名宝でありました。

行事予定



七月 五日 まこと会 総会・夏法座

午後一時半より

★会員各戸ご案内をお送りいたします

八月 十三日 光圓寺 盆法座

午前九時半より

★初盆のご家庭へ各戸ご案内をお送りします

毎月第一火曜日と第三金曜日の午後

本堂にてヨガの会を行っております。

コロナでなまなかった体のリフレッシュに

お気軽にご参加くださいませ。

春季永代経法要が勤まりました

五月二十四日、二十五日に光圓寺春季永代経法要が勤まりました。住職の義弟でもある石上光鏡師に埼玉県よりお越しいただき、初めてご登壇いただきました。

ちようど今年が親鸞聖人御誕生八百五十年、立教開宗八百年にあたることを踏まえて、親鸞聖人の歩みを歴史的な時代背景を交えてお話しいただきました。また、真宗の教えに出遇うことを本に例えて、ここに救われる教えがあるとしてもその本を開かない限り私はその教えに気づくことができない。その本を開く行為がお聴聞であり、お聴聞を通してそこにある救いに気づくことができないのです。決して私を見捨てることのない存在が居てくださると受け止めることができたら、あたたかで安心な日々が開けてくるとお示し下さいました。



死ぬもよし　生きるもまたよし

生き死にの　峠に立ちて　ただ念仏をする

梅原眞隆和上（一八八五～一九六六）

「このまま一人で長生きしてしまうのが恐いので、早く逝ってしまいたい」をいう言葉を耳にすることがあります。しかしながら、その一方で病氣予防のために食事や薬など日頃から気を使って過ごす姿があります。

そのような態度をおかしな矛盾と捉えることもできますが、これが私たちの真実の姿なのかもしれません。結局、多くの人が「死ぬもよし　生きるもまたよし」ではなく、「死ぬも恐く　生きるもまた恐い」と考えながらいきているのではないのでしょうか。

死が近くに迫った際に、「今夜が峠だ」という言葉がよく使われます。しかし、無常の世界に生きる私たちは、普段から「生」と「死」の峠に常に立たされています。このことを忘れてはなりません。

そのような状況の中で、多くの不安を抱えている私を救いとするために、阿弥陀さまはお浄土を建立されました。そして、私を苦悩から解放するために阿弥陀さまは「南無阿弥陀仏」のお念仏を届けてくださったのです。お念仏は他の誰のためでもなく、まさにこの私のためにあります。

お念仏がまさに私自身のためにあることに気づかされ、阿弥陀さまの広大な慈悲に真に触れたときに、「生きることも死ぬこともただただ有り難い」という世界が開けてくるのです。最後に梅原和上の句をもう一つ。

念仏せよ　ただ念仏せよ　念仏せよ

大悲回向の南無阿弥陀仏

（『大乘』六月号　お寺の掲示板より）

今回は、『大乘』六月号のお寺の掲示板というコラムから抜粋してご紹介させていただきました。

梅原和上は『歎異抄』を愛読し、親鸞聖人の御跡を慕いつつ、一途に浄土真宗の研究に人生をささげた方でした。二つの句の文字だけ見れば念仏するという行為のみを強く勧めているように感じるかもしれませんが、声に出して読んでみるとその根底にはお念仏に対する確固たる信頼が息づいていることを感じます。「死ぬも恐く、生きるもまた恐い」私たちではありますが、阿弥陀如来のご本願に触れ、そのお心に気づかされた時、お念仏への強い信頼が生まれます。これらの句は和上のそのお心のままに詠まれた句でありましよう。

梅原和上のただ一つの道を得た喜びが怒濤の如く感じられます。

（坊守）